

歴史文クラブ 28年12月研修会

実施日：平成28年12月20日（火）

集合：近鉄大和西大寺駅北口 9時

スケジュール：

9：00～12：00 佐保・佐紀の歴史探訪

13：00～16：00 座学（佐保川地域ふれあい会館）

資料

資料－①平城京の保存活動

- ・平城京保存の略史
- ・平城宮跡保存運動の人々

資料－②隆光大僧正

資料－③松林苑

歩行ルート地図

平成29年度年間活動計画（案）

奈良・人と自然の会
歴史文化クラブ

担当世話人：川井秀夫・鈴木末一
（事務局・連絡先 古川祐司）
（TEL0742-44-8621、090-4298-2344）

平城京の保存 略史 千田稔著「平城京遷都」より抜粋

1852年（嘉永5年） 大和国添上郡古市村住民、北浦定政が自ら測量器を使い「平城宮大内裏跡坪割之図」を作成。平城京に関する先駆的な歴史地理学調査である。

1906年（明治39年） 棚田嘉十郎、溝辺文四郎らが、平城京社保存会を組織する。 関野貞の研究活動に影響を受けた棚田が中心的に活動。民間の有志による寄付金による保存整備事業を目的とし、第2次内裏南半分と朝堂院を対象とした。

1907年（明治40年） 関野貞「平城京及大内裏考」が刊行される。関野は明治30年から明治34年まで奈良県の技師として古社寺の調査に従事、史料と現地調査によって詳細な平城京の復元研究をし、学位論文として東京帝大に提出した。今日に至るまで平城京の基本的文献として研究者の指針とされている。

1910年（明治43年） 平城京遷都1200年にあたり、平城宮社保存会により、大極殿跡で記念祭が行われた。

1913年（大正2年） 侯爵徳川頼倫を会長とする、奈良大極殿保存会が設立。

1915年（大正4年） 土地所有者による京跡の土地の寄付、一般寄付金による購入、篤志家による土地の購入と寄付などで保存事業は進展した。

1922年（大正11年） 史蹟名勝天然記念物保存法により史跡に指定される。平城宮社保存記念碑建立される。保存会保管の土地は国に寄付。棚田は大正10年死去。（割腹自殺）

1960年（昭和35年） 平城遷都1250年祭が行われる。奈文研に発掘調査事務所設置。

1962年（昭和37年） 近鉄検車区を宮跡南西部に建設する計画が発表されるも、文化財保護委員会は買い上げ予算がなく、近鉄に対して着工許可。衆議院文教委員会で問題視。奈良県知事が奈良県で買い上げを提案。飛鳥平城宮跡保存会（理事長薬師寺管主）が結成される。

1963年（昭和38年） 池田首相、全部を40億円で購入発言。それに関連して近鉄検車区が宮跡の区域外に建設計画を変更。

1964年（昭和39年） 国道24号線バイパス予定路線の発掘調査。平城宮が東に張出し、宮域が方八町の正方形でないことが判明。

1967年（昭和42年） 衆議院文教委員会で文部大臣が路線変更を表明。奈良県は変更には消極的。（大阪万博が迫っていることが理由）

1969年（昭和44年） バイパス工事着工。平成3年全線完成。

1997年（平成9年） 朱雀門復元工事完成。

1998年（平成10年） 東大寺・興福寺・春日奥山・正倉院などと共に平城宮跡が「古都奈良の文化財」として世界遺産に指定される。東院庭園の復元工事完成。

2010年（平成22年） 平城遷都1300年にあたり、第一次大極殿完成。

平城宮跡 保存運動の人々

①江戸時代・・・北浦定政

1852年（嘉永5年）伊勢津藩古市奉行所の役人で民間の陵墓研究家でもある北浦定政が古文書の研究と、一部を測量して平城京の正確な復元図である『平城宮大内裏跡坪割之図』を1852年（嘉永5年）36歳で作成して、同時に平城宮の跡地を推定した。

②明治時代・・・関野貞

建築史家、関野貞が田圃の中にある小高い芝地、通称「大黒芝」が大極殿の基壇である事を発見し、1907年（明治40年）に「いにしへの奈良一平城宮大極殿遺址考一」を旧・奈良新聞に発表した。この時は1次2次の変遷があることが分からず太平洋戦争後に第二次朝堂院跡の大極殿であることが確定した。その後平城京研究論文『平城京及大内裏考』で、工学博士号を得る。さらに平城京の全体図、平城宮の図、平城京周辺の班田図などを作成した。

③棚田嘉十郎、山下鹿蔵、溝辺文四郎らによる保存運動

棚田嘉十郎は、もともとは植木商であった。平城宮跡の保存に乗り出すのは、明治29年（1896）12月、佐紀村の人、山下鹿蔵に連れられて、平城宮大極殿跡の土壇を訪れたことが切っ掛けだった。その時、嘉十郎は「農家が、牛を繋ぐので、その芝地に牛の糞、所々に山の如くに積み重なり、実に見る影もなき有様、之れを皇居の址といわれ様ようか」と涙を流したと、山下鹿蔵の息女であった山下マスエさんの覚え書にある。

その後、溝辺文四郎とともに行政にも協力を呼びかける。徳川頼倫を会長とする「奈良大極殿址保存会」に結実し、団体としての保存運動が展開される。徳川頼倫はヨーロッパの遺跡や文化財も現地視察し、民間での文化財保護運動を推進し、遺跡の現状保存に詳しかった。棚田は東京の国会や政治家にも赴き働きかけるが、仕事も放棄して活動し困窮する。保存運動が拡大し1921年（大正10年）平城宮跡の大極殿中心とする部分が民間の寄金によって買い取られる。

しかし協力するとの約束で、予定地の約3分の2を団体名義で買った宗教団体は寄付の約束と相違する方針を述べるようになり、このトラブルの中で周囲に非難され、棚田は割腹自殺する。この後、買収地は、ほとんどが国に寄付され、1922年（大正11年）平城宮第二次大極殿と朝堂院跡として史跡名勝天然記念物保存法による史跡に指定された。

「青年の志—平城宮跡を守った男たち」

北浦定政は奈良古市の人で、国学の系譜に連なる市井の研究家でした。若年のころから学問にいそしみ、19世紀の半ば頃にいくつかの重要な成果を築きます。一つは天皇陵の比定研究で、もう一つが班田制と平城京プランの研究でした。いずれも、定政を駆り立てた動因は、幕政が行き詰まり不安定な国内情勢の中、迫り来る欧米列強による日本征略の危機に、国学思想の末端を担うものとして、国難を回避するために、いにしえの天皇を中核とする国のかたちを追究するという使命感であったと思います。定政が平城京の正確な復元図である「平城宮大内裏跡坪割之図」を完成したのは嘉永5年（1852）のことでした。この年、定政は36才。

棚田嘉十郎は、もともとは植木商をなりわいとしていました。こんにち奈良公園や奈良国立博物館の周辺に樹影をみせている大木の多くは、明治時代の後半に嘉十郎が植えつけたものです。その嘉十郎、いくつかの由縁があって平城宮跡の保存に乗り出すのですが、決定的なきっかけとなったのは、明治29年（1896）12月、知り合いであった佐紀村の人、山下鹿蔵に連れられて、平城宮大極殿跡の土壇にはじめて身を置いた時のことでした。目に一丁字（いっていじ）もなかった嘉十郎の口述筆記録には「農家が、牛を繋ぐので、その芝地に牛の糞、所々に山の如くに積み重なり、実に見る影もなき有様、之れを皇居の址といわれようか」とあります。また山下鹿蔵の息女であった山下マスエさんの覚え書きによると、その時、嘉十郎は落涙をとどめることができなかつた様子であったといえます。この

時、嘉十郎36才。奇しくも北浦定政が平城京図を完成した年令と同じです。以後、嘉十郎は多くの志ある人々の協力を得つつ、平城宮跡の顕彰という苦難に満ちた道に邁進します。皇室尊崇の念篤あつく、あまりにも実直であった嘉十郎は、大正時代のなかばに至り、保存事業が着々を進捗するさなかにながら、ある深刻な問題に巻き込まれ、自身の潔白をあかすために自ら死を選ぶこととなります。

嘉十郎の平城宮跡保存の原動力となったのは、尊皇の深い思いでした。幕末から明治維新後、欧米列強によるアジア覇権の脅威が一層強まります。それに対抗するために、わが国は天皇を至上とする国家体制構築をめざします。嘉十郎の皇室尊崇の思いの深さは、そうした社会思潮の流れの中でこそ理解されなければならないでしょう。

ともあれ、平城宮跡の保存・研究の重要な局面で重要な働きをみせる男達がいずれも30代の青年であったことは、興味深いことです。ちなみに、平城宮・平城京の学術的研究の礎を築いた関野貞がその研究の成果を初めて公にしたのは1900年の年頭でしたが、その時、彼は33才、まさに少壮の研究者でした。

（奈文研元・副所長 井上和人）（抜粋）

平城宮跡保存運動

*** 溝邊文四郎 ***



溝邊文四郎は嘉永6年（1853年）12月22日、平城宮跡にほど近い大和国添下郡超昇寺村（そえしもぐんちょうしょうじむら）（現在の奈良市佐紀町（さきちょう））に生まれました。

お茶の販売業を営んでいましたが、棚田嘉十郎と知り合ってその影響を強く受け、ともに平城宮跡の保存運動に力をつくしました。

嘉十郎らは明治33年（1900年）に私財を投じ、幕末に北浦定政（きたうらさだまさ）がつくった「平城大内裏敷地図」を複製して広く配り、奈良県民に平城宮跡の保存を呼びかけるとともに、翌明治34年（1901年）には朝堂院跡に木標（木でつくった目印）を建てました。明治39年（1906年）には「平城宮址保存会」をつくり、政府に宮跡保存を陳情するとともに、広く寄付を募って宮跡の買収を進めました。

こうした努力が実を結び、明治43年（1910年）11月には平城奠都千二百年祭が開催され、「平城宮大極殿跡」の木柱が建てられました。ようやく政府、県も平城宮の保存に積極的に乗り出すようになったのです。

また、明治45年（1912年）3月には現在のJR奈良駅前の三条通り沿いに「平城宮大極殿跡西是より二十町」と記した石標を建て、大正2年（1913年）には「奈良大極殿址保存会」を結成し、莫大な私財を提供して跡地の買収活動に力をつくしています。



▲ 幻のご神体（元明天皇座像）

溝邊家に保管されている像は、高さ30cmの木製で、手を袖に隠して膝の上で組み、髪は頭上で束ねてふくよかなお姿である。

1907年8月の日記に、溝邊さんは「元明天皇陛下ノ御座像新調シテ家内ニ之レヲ安置奉祀シ朝夕礼拝スル事ニ決心」などと制作の経緯を記しています。そして、溝邊さん宛の手紙から、興福寺の国宝修理にかかわっていた仏師・本多権平の作であることも判明しています。

溝邊家では、毎年正月に床の間に飾り礼拝しているという。普段は「平城宮」と書かれた箱に収められています。遷都1300年を迎えた一昨年は、一年間、箱から出してお祭りをされたと聞いています。

平城宮跡は1900年、「大黒の芝」と呼ばれていた土壇が、大極殿跡であるという建築史家の関野貞氏の発表をきっかけに、保存活動が本格化、以来関係者の幾多の苦難を乗り越えた尽力により、大正11年（1922年）国の史蹟に指定されましたが、その前に二人とも亡くなっています。しかし、その遺志は、その後も引き継がれ発掘調査や整備が進められながら、今日の平城宮跡が存在しているのです。



隆光大僧正について

慶安 2 年 2 月 8 日 (1649 年 3 月 20 日) ~ 享保 9 年 6 月 7 日 (1724 年 7 月 26 日)) は、江戸時代中期の新義真言宗の僧。出自は大和国の旧家河辺氏。初名は河辺隆長、字 (あざな) は栄春。

1658 年 (万治元年) 仏門に入り、長谷寺・唐招提寺で修学した後、奈良・醍醐で密教を修め、儒学・老荘をも学んだ。1686 年 (貞享 3 年) 5 代将軍徳川綱吉の命により将軍家の祈禱寺である筑波山知足院の住職となったのを機に、急速に綱吉の帰依を得た。

1688 年 (元禄元年) には知足院を神田橋外に移して護持院と改称してその開山となった。1695 年 (元禄 8 年) には新義真言宗の僧では初めて大僧正となっている。宝永 4 年 2 月 25 日隠居し、駿河台成満院へ転住する。

綱吉の死去と共に失脚。宝永 6 年 (1709 年) には江戸城への登城を禁じられ、筑波山知足院への復帰願いも認められず、失意の内に大和に帰郷し、超勝寺にて没したという。墓所は大阪府太子町と奈良市の佐紀幼稚園裏の 2 カ所にある。

綱吉及び綱吉の生母桂昌院の寵を受け、生類憐れみの令を発令することを勧めたとされているが (注)、京・奈良の寺社の再建を綱吉・桂昌院親子に奨めた人物でもあり、特に東大寺大仏殿の再建にあたり、東大寺の公慶上人を助け、将軍綱吉とその母桂昌院に援助を勧めた人として知られている。

(注)

その時期には隆光はまだ江戸にいなかったと言われることもある。ただ、『密教大辞典』(法蔵館)・『真言宗年表』(国書刊行会)によると貞享 3 年(1686 年)10 月 3 日に江戸城黒書院で安鎮法を修している。つまり生類憐れみの令以前より江戸城に出入りしていた。

歴史見聞 元禄の大仏再建

大佛は修理開眼を終えましたが、大佛殿再建はそう簡単にはいきません。ここに隆光大僧正(1649~1724)と公慶上人との出会いが必要となってきました。隆光は大和の国の人で、唐招提寺の朝意にしたがって、真言宗の豊山派について勉学を積みました。そして南都や高野山に学んで顕密2教をきわめ、貞享3年(1686)徳川綱吉の命によって筑波山知足院の院主となっています。また、江戸の神田橋付近に寺を構え、のちに護持院と称しました。

隆光僧正は一小僧の公慶が、大佛殿再建という大それた計画に心血を注いでいるのに痛く感激し、それにはまず徳川幕府を動かさなければならぬと考えました。元禄6年(1693)大佛の修復も完成に近づいた頃、隆光は将軍綱吉に公慶上人を会わせる計画を立てました。

「天下泰平を祈り、仏法の隆盛と、貴賤の施主二世安楽を祈り、さらに仰ぎ願わくば信心堅固、まさに大佛造立の勝縁に結ばれんことを」と公慶上人は勸進の趣旨を説き、江戸市中に唱えて勸進をはじめました。そして江戸の高野山大徳院に大佛勸進所を開いて、本格的に幕閣などに働きかけ、仲介者としての隆光大僧正が、大和国の出身であることに公慶上人は無限の期待を抱きました。殊に徳川5代将軍綱吉は“生類憐れみの令”を出した熱心な仏教徒であり、隆光僧正の自坊である知足院を度々訪れています。それを知った公慶上人は、その機会こそ将軍へ大佛殿再建の真意を語る時と考えました。元禄6年(1698)2月9日、そのために公慶上人は隆光僧正の指示により知足院を訪れました。時に将軍綱吉は、阿部豊後守正武、柳沢出羽守保明、秋元但馬守高知とともに知足院の護摩堂に入り、護摩がすんで、僧正の書院にて休んでいました。そして、隆光僧正により公慶上人が紹介されま



した。そこで上人は自分の大佛殿再建の主旨を熱心に述べましたが、綱吉はその努力を労うだけでした。

ついで公慶上人は、同年2月29日、将軍の生母の「三の丸さま」桂昌院との対面が実現しました。『大佛縁起』や俊乗房重源上人の鎌倉時代再建の故事などを物語りました。この時、桂昌院はかなり公慶上人の真意に打たれるものがありました。

8月15日、上人はふたたび隆光僧正により将軍綱吉と会うことが出来ました。その時は綱吉の演能があり、演目は『安宅』でありました。この安宅には、弁慶の勸進帳を詠むくだりがあります。公慶上人は必死でこの能を見つめました。そのときに流した上人の涙を綱吉は見逃がさず、そして公慶の純粋な心に打たれました。綱吉の安宅の演能に泣いた公慶上人に綱吉が理由を問いただすと、これに応えた上人は、「今日拝見した安宅の御能は、狂言とはいいながら、昔、俊乗房重源、南都大佛殿建立のため、諸国を勸進せらるることは、定めて莫大の苦勞なるべく、今我に比べて、其の勞煩い心魂に徹しければ、落涙止みがたく、涕泣仕ると申し上げたてまつる」と答えています。将軍綱吉はこのとき本当の上人の心を知ることになりました。また、隆光僧正の手引きによる、この公慶上人との結縁を心から喜びました。全くこの時、大佛殿再建は約束されたものでありました。公慶上人は先に寺社奉行を通じて、幕府から10万両の勸進許可を貰ったことを喜ぶと同時に、今度は大佛開眼に行なった努力と方法を、大佛殿再建に当てはめました。

松林苑

松林苑は、『続日本紀』に「松林苑・松林・松林宮・北松林」として記載された平城宮に属する施設である。

1、松林苑

『続日本紀』には、

- ・天平元年(729年)3月3日の条に天皇が松林苑に群臣を集めて宴をもよおし、諸司并朝集使主典以上を御在所に率い、物を賜ったとあるのが初見である。
- ・同年5月5日にも、天皇松林御し、王臣五位以上を宴し、物を賜わった。
- ・翌年の天平2年3月3日にも五位以上を松林宮で宴し、天平7年(735年)5月5日にも天皇北松林に御し、騎射を覧す。
- ・天平10年(738年)1月17日には皇帝松林に幸し文武官に宴を賜う。
(このように松林苑は天平元年までに作られ、3月3日や5月5日の節句、節句の宴に使われたことが知られる。)
- ・天平17年(745年)5月18日には「天皇親しく松林倉庫に臨み、陪従人等に穀を賜う、これ差あり」

と記している。これらの記述からして、松林苑は単なる苑とではなく、天皇の禁苑の性格を持つ苑であったと考えられている。

2、松林苑跡

①最初の調査の経緯

1972年7月、瓢箪山古墳の東側南方に土塁状遺構の存在を認めた。

写真は1982年橿原考古学研究所調査による松林苑の築地堀
(出展：平城京跡資料館図録)



松林苑の範囲については、松林苑が確認された当初、踏査によって確認できた土塁をもとに、南辺 500m、東辺 1000m 以上を想定し、これを外郭と考えた。

その後 47 年に発見された土塁をきっかけに調査が進み、「県遺跡地図」では水上池の東側で区切る東西約 1 キロ、南北約 1・3 キロが想定されている。

②その後の遺跡発見により苑の範囲は 1.5 倍に拡大

《2012 年 4 月 17 日 奈良新聞によると》

築地跡が確認された尾根=奈良市佐紀町

平城宮の北側に営まれた奈良時代の庭園施設「松林苑」が、現在の想定約 1.5 倍の規模だったことが確実にされた。

県立橿原考古学研究所が奈良市佐紀町で踏査を行い、東を区切る築地跡を初めて見つけた。県の遺跡地図も改められる見込みで、平城宮の倍近い“大松林苑”が正式に認められることになる。

平成 9 年には、さらに東側の航空自衛隊幹部候補生学校(奈良市法華寺町)の敷地内で庭園跡や大量の瓦が見つかり、範囲の広がりが見えてきた。

踏査は同研究所の所員 9 人が参加して行われ、地形などから推定される松林苑の東端と北西隅を歩いて築地の痕跡などを探した。

「東の築地跡は国道 24 号西側の尾根で見つかり、幅 4.5～4.8 メートル、高さ 0.5～0.8 メートルの高まりが長さ約 100 メートルにわたって続いていた。遺跡地図の範囲から約 350 メートル東側で、同研究所はウツナベ古墳も取り込むとみている。尾根の斜面では瓦や土器など約 20 点の遺物を採取。瓦の様式は続日本紀に松林苑が登場する年代(729～746 年)と一致した。」

「松林苑の範囲は現在の想定から東西距離が大幅に伸び、約 1.8 キロ。面積も約 1.5 倍に広がる。」

「同研究所の木下亘・調査課長は「東の築地の可能性が高く、(想定範囲外で見つかった遺構が松林苑の施設と言えるようになる」と話している。」



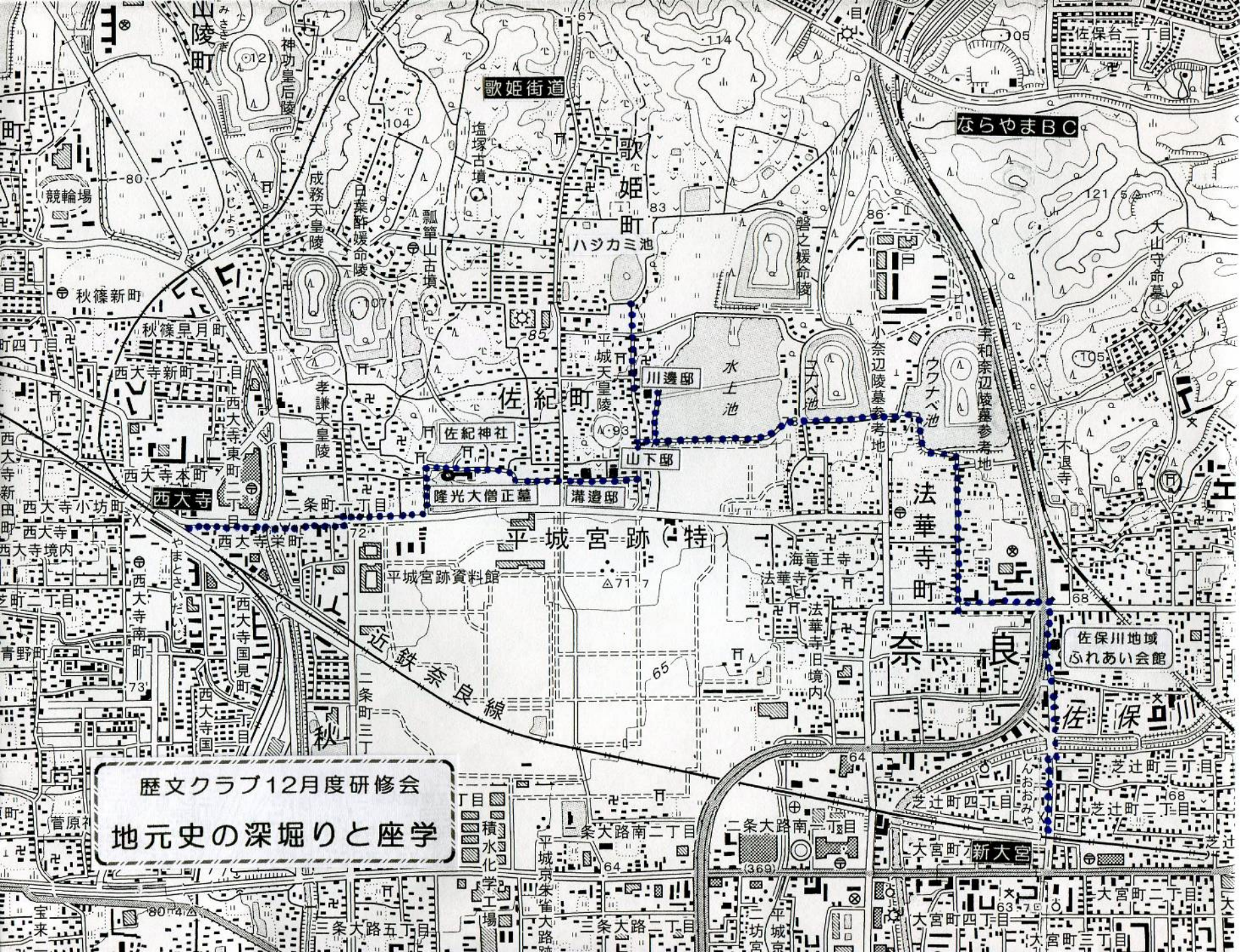
従来の内郭推定地と周辺建物検出



平成24年までに確認された築地塀跡



築地跡が確認された尾根=佐紀町



歌姫街道

ならやまBC

歌姫町

佐紀町

法華寺町

奈良

佐保川地域
ふれあい会館

佐保川

歴文クラブ12月度研修会

地元史の深掘りと座学

積水化学工場

大宮町 新大宮

大宮町 三丁目

大宮町 二丁目

大宮町 四丁目